

日蓮大聖人御書全集

なんじょうどのごへんじ

南条殿御返事

おおはしのたろう こと

(大橋太郎の事)

新版
1856
〜
1861

なんじようどのごへんじ おおはしのたろう こと

南条殿御返事（大橋太郎の事）

けんじ ねん うらうろ がつ にち さい なんじようときみつ

建治2年（'76） 閏3月24日 55歳 南条時光

帷 ひと 塩 一 駄 油 ご 升 た そうら お

かたびら一つ・しおいちだ・あぶら五そう、給び候い

わんぬ。

衣 寒 防 熱 身 隠

ころもはかんをふせぎ、また、ねつをふせぐ。みをかくし、

飾 ほけきよう だいしち 薬 王 品 い はだか

みをかざる。法華経の第七やくおうほんに云わく「裸なる

もの ころも え とうらんぬん こころ 裸 者

者の衣を得たるがごとし」等云々。心は、はだかなるもの

衣 得 文 こころ 嬉

のころもをえたるがごとし。もんの心は、うれしきことを

説 そうろう 付 法 蔵 ひと しょうなわしゆ もう ひと

とかれて候。ふほうぞうの人のなかに商那和衆と申す人

ころも 着 生

たも

せんじょう

ぶつぽう

あり。衣をきてむまれさせ給う。これは先生に仏法に

衣 供 養

ひと

ほけきょう

い

ころもをくようせし人なり。されば、法華経に云わく

にゆうわにんにくえ とううんぬん

「柔和忍辱衣」等云々。

崑 崙 ざん

いし

身 延 岳

塩

いし

こんろん山には石なし、みのぶのたけにはしおなし。石な

玉

石 勝

塩

きところには、たまよりもいしすぐれたり。しおなきとこ

塩

米

勝

そうろう

こくおう

宝

そう

ろには、しお、こめにもすぐれて候。国王のたからは左右

おおとみ

そう

おおとみ

えんばい

もう

味噌

塩

の大臣なり。左右の大臣をば塩梅と申す。みそ・しおなけれ

世 渡

難

そう

しん

くに 治

ば、よわたりがたし。左右の臣なければ、国おさまらず。

油

もう

ねはんぎょう

い

かぜ

油

あぶらと申すは、涅槃経に云わく「風のなかにあぶらな

し。あぶらのなかにかぜなし。風をじする第一のくすりなり。

かたがたのものおくり給びて候。御心ざしのあらわれ

て候こと、申すばかりなし。せんずるところは、こ

なんじようどのの法華経の御しんようのふかかりしことの

あらわるるか。「王の心ざしをば臣のべ、おやの心ざしを

ば子の申しのぶる」とは、これなり。あわれ、ことのうれ

しとおぼすらん。

つくしにおおはしの太郎と申しける大名ありけり。

たいしよう 殿

ご 勘 氣

被

鎌

倉

由 比

浜

大将どのの御かんきをかぼりて、かまくらゆいのはま、

土 牢 籠

十二年 召 始

つちのろうにこめられて十二年。めしはじめられしとき、

筑 紫 打 出

御 前 向

もう

弓 矢

つくしをうちいでしに、ごぜんにむかいて申せしは「ゆみや

取 身

君

ご 勘 氣

被

歎

とるみとなりて、きみの御かんきをかぼらんことはなげき

御

前

幼

馴

今

離

ならず。また、ごぜんにおさなくよりなれしが、いまはなれ

言

男 子

んこというばかりなし。これはさておきぬ。なんしにても

女 人

いちにん

歎

懷

妊

によしにても、一人なきことなげきなり。ただし、かいにん

由

語

たも

女 子

のよし、かたらせ給う。おうなごにてやあらんずらん、

男 子

そつら

行 方

見

口

おのごごにてや候わんずらん。ゆくえをみざらんことくち

惜 おし。また、かれが人となりて、ちちというものもなから
歎 思 者 無
んなげき、いかがせんとおもえども、力及ばず」とていで
出
にき。

つき日過 事 故 う 男 子
かくて月ひすぐれば、ことゆえなく生まれにき。おのこご

にてありけり。七歳のとし、やまでらにのぼせてありけれ
しちさい 年 山 寺 登

ば、ともだちなりけるちごども、「おやなし」とわらいけり。
友 達 稚 児 親 無 笑

いえにかえりて、ははにちちをたずねけり。はは、のぶる
家 帰 母 父 尋 母 述

かたなくして、なくより外のことなし。このちご申す。「天
方 泣 ほか 稚 児 も う てん

なくしては雨ふらず。地なくしてはくさおいず。たとい母あ
あめ降 ち 草 生 はは

りとも、ちちなくばひととなるべからず。いかに父のあり

所 父 人 生 ちち 在 隠 たも 責 はは い

どころをばかくし給うぞ」とせめしかば、母せめられて云う、

和 稚 児 幼 もう 有 様

「わちごおさなければ申さぬなり。ありようはこうなり」。

稚 児 泣 もう 様 父 形 見

このちご、なくなくと申すよう、「さて、ちちのかたみはな

もう 大 橋 先 祖

きか」と申せしかば、「これあり」とて、おおはしのせんぞ

日 記 腹 うち こ 讓 じひつ じよう

の日記、ならびにはらの内なる子にゆずれる自筆の状なり。

親 恋 泣 ほか

いよいよおやこいしくて、なくより外のことなし。「さて、

言 ろうじゆう 数 多 供

いかがせん」といいしかば、「これより郎従あまたともせ

ご 勘 氣 被 皆 散 失

しかども、御かんきをかぼりければ、みなちりうせぬ。そ

ののちは、いき^後てや、またし^生にてや、おと^死ずる^音人^信なし^{ひと}」
と^語かたり^伏ければ、ふし^転ころ^泣び^諫なき^用て、い^用さ^用む^用る^用を^用も^用も^用ち^用い^用
ざ^用り^用け^用り^用。

母云己山寺登親
ははいわく「おのれをやま^己で^山ら^寺に^登の^親ぼ^親す^親る^親こ^親とは、お^親や^親の^親

孝養進
き^孝よう^養よう^進の^進た^進め^進な^進り^進。仏^進に^進花^進を^進も^進ま^進い^進ら^進せ^進よ、^進経^進を^進も^進

いっかん読
一^い巻^っよ^{かん}み^読て^読孝^読養^読と^読す^読べ^読し^読」^読と^読申^読せ^読し^読か^読ば、^読い^読そ^読ぎ^読寺^読に^読の^読ぼ^読

り^読て、^読い^読え^読へ^読か^読え^読る^読心^読な^読し^読。昼^読夜^読に^読法^読華^読経^読を^読よ^読み^読し^読か^読ば、^読

よ^読み^読わ^読た^読り^読け^読る^読の^読み^読な^読ら^読ず、^読そ^読ら^読に^読お^読ぼ^読え^読て^読あ^読り^読け^読り^読。

さて^読十^読二^読の^読と^読し、^読出^読家^読も^読せ^読ず^読し^読て^読か^読み^読を^読つ^読つ^読み、^読と^読か^読く^読

筑紫 逃出 鎌倉 もう 尋

してつくしをにげいでて、かまくらと申すところへたずね

入 はちまん おんまえ 参 伏 拝 もう

いりぬ。八幡の御前にまいりて、ふしおがみ申しけるは、

はちまん だいぼさつ にほん だいじゆうろく おう ほんじ りようぜんじようど

「八幡大菩薩は日本第十六の王、本地は靈山浄土に

ほけきよう 説 たま きようしゆしやくそん しゆじよう 願 満

法華経をとかせ給いし教主釈尊なり。衆生のねがいをみ

たま かみ 現 たも いま 我 願 満

て給わんがために、神とあらわれさせ給う。今わがねがいみ

たま 親 い そうろう 死 そうろう もう

てさせ給え。おやは生きて候か、しにて候か」と申し

戌 とき ほけきよう 始 寅 とき 読

て、いぬの時より法華経をはじめて、とらの時までによみ

幼 声 宝 殿 響 渡

ければ、なにとなくおさなきこえ、ほうでんにひびきわたり、

心 凄 参 ひとびと 帰

こころすごかりければ、まいりてありける人々もかえらん

忘

ことをわすれにき。皆人、いちのようにあつまりてみけれ

みなひと

市

集

見

幼

ひと

ほっし

女

ば、おさなき人にて法師ともおぼえず、おうなにてもなか

りけり。

折

京

二位

殿

ご参

詣

ひと目

おりしも、きようのにいどの御さんけいありけり。人めを

忍

たま

参

たま

おんきよう

尊

しのばせ給いてまいり給いたりけれども、御経のとうとき

常

勝

果

ごちようもん

こと、つねにもすぐれたりければ、はつるまで御聴聞あり

帰

たま

名

残

惜

けり。さてかえらせ給いておわしけるが、あまりなごりのお

ひと

付

置

たいしやうどの

しさに人をつけておきて、大将殿へ「かかることあり」と

もう

たま

召

じぶつごう

おんきよう

読

申させ給いければ、めして、持仏堂にして御経よませまい

らせ給いけり。たま

つぎ ひ ごちようもん

さて次の日、また御聴聞ありければ、西のみかど、人さわ

にし 御門 ひと 騒 きよう

ぎけり。「いかなることぞ」とききしかば、「今日は、

因 人 頸 切 聞 哀 我

めしゅうどのくびきらるる」とののしりけり。あわれ、わが

親 今 あ 思 旬 哀 我 ひと

おやはいままで有るべしとはおもわねども、さすが人の

頸 切 もう わ み 歎 思

くびをきらると申せば、我が身のなげきとおもいて

涙 たいしようどの 怪 御覽 和

なみだぐみたりけり。大将殿、あやしとごらんじて、「わ

稚 児 者 もう

ちごはいかなるものぞ。ありのままに申せ」とありしかば、

かみ 件 いちいち もう 侍

上くだんのこと、一々に申しけり。おさぶらいにありける

だいみよう

しょうみよう

御簾

うち

皆袖

絞

大名・小名、みすの内、みなそでをしぼりけり。

たいしょうどの

梶

原

召

仰

おお橋

大將殿、かじわらをめしておおせありけるは、「大はしの

たろう

囚

人

参

太郎というめしゆうどまいらせよ」とありしかば、「只今

頸切

由比

浜

遣

そうら

今

切

くびきらんとて、ゆいのはまへつかわし候いぬ。いまはき

そうろう

もう

稚児

おん前

りてや候らん」と申せしかば、このちご、御まえなりけ

伏

転

泣

仰

れども、ふしころびなきにけり。おおせのありけるは、

梶

原

我

走

き

具

「かじわら、われとはしりて、いまだ切らずば、ぐしてま

急

由比

浜

馳

行

いれ」とありしかば、いそぎいそぎ、ゆいのはまへはせゆく。

至

呼

くびき

かたな

いまだいたらぬによばわりければ、すでに頸切らんとて刀

をぬきたりけるときなりけり。

抜 時 梶原大橋 太郎 縄付 具

さてかじわら、おおはしの太郎をなわつけながらぐしま

大庭引据 たいしやうどの

いりて、おおにわにひきすえたりければ、大将殿、「この

稚児取 稚児 走 下 縄

ちごにとらせよ」とありしかば、ちご、はしりおりてなわを

解 おお橋 たるう こ 知

ときけり。大はしの太郎は、わが子ともしらず、いかなる

故 助 知 たいしやうどの

ことゆえにたすかるともしらざりけり。さて、大将殿、ま

召 稚児 様々 おん布施給 大橋

ためして、このちごにようようの御ふせたびて、おおはしの

たろう 給 ほんりやう あんど

太郎をたぶのみならず、本領をも安堵ありけり。

たいしやうどの 仰 ほけきやう おんこと むかし

大将殿、おおせありけるは、「法華経の御事は昔よりさ

聞 伝

まる み 当

ふた

ることとはききつたえたれども、丸は身にあたりて二つの

故 ひと こしんぷ おん 頸 だじょうのにゆうどう き

ゆえあり。一つには、故親父の御くびを太政入道に切ら

浅 しんぶつ

れてあさましともいうばかりなかりしに、いかなる神仏に

もう 思 そうとうさん みようほうあま ほけきよう 読

か申すべきとおもいしに、走湯山の妙法尼より法華経をよ

伝 せんぶ もう とき 高 雄 文 覚 ぼう 親

みつたえ、千部と申せし時、たかおのもんがく房、おやの

首 持 きた 見 うえ 敵 う

くびをもて来つてみせたりし上、かたきを打つのみならず、

にほんこく ぶし たいしよう たま ほけきよう

日本国の武士の大將を給わりてあり。これひとえに法華経

ごりしよう ふた 稚 兒 親 助

の御利生なり。二つには、このちごがおやをたすけぬるこ

ふしぎ おおはしのたろう 奴 よりとも 奇 怪

と、不思議なり。大橋太郎というやつは、頼朝、『きかいな

思

ちよくせん

返

もう

頸

り』とおもう。たとい勅宣なりとも、かえし申してくびを

切

憎

じゆうにねん

つち

牢

きりてん。あまりのにくさにこそ十二年まで土のろうには

い

ふしぎ

ほけきよう

もう

入れてありつるに、かかる不思議あり。されば、法華経と申

有

難

よりとこ

ぶし

たいしよう

おお

すことはありがたきことなり。頼朝は武士の大將にて、多

罪

積

ほけきよう

しん

そつら

くのつみつもりてあれども、法華経を信じまいらせて候え

思

涙

たま

ば、さりともとこそおもえ」と、なみだぐみ給いけり。

いま

おんこころ

見そつら

こ 南

条

殿

こ

今の御心ざしみ候えば、故なんじようどのは、ただ子な

愛

思

ほけきよう

ればいとおしとはおぼしめしけるらめども、かく法華経を

わ

孝

養

思

もつて我がきようようをすべしとは、よもおぼしたらじ。

罪

所

ご

たといつみありていかなるところにおわすとも、この御

孝 養

こころ

闇 魔法 王

梵 天

きようようの心ざしをば、えんまほうおう・ぼんてん・

帝 釈

知

しゃかぶつ

ほけきよう

たいしやくまでもしろしめしぬらん。釈迦仏・法華経もい

捨

たも

稚児

父

繩

解

かでかすてさせ給うべき。かのちこのちちのなわをときし

おんこころ

違

涙

と、この御心ざし、かれにたがわず。これはなみだをもち

書

そうろう

てかきて候なり。

蒙 古

起

由

承

また、むくりのおこれるよし、これにはいまだうけたまわ

もう

にちれんぼう

蒙 古 国

渡

らず。これを申せば、「日蓮房はむくり国のわたるといえば

喜

もう

謂

よろこぶ」と申す。これ、ゆわれなきことなり。「かかるこ

とあるべし」と申せしかば、あだかたきと人ごとにせめし

きようもん 限

きた

言

叶

が、経文かぎりあれば来るなり。いかにいうともかなうま

とが

くに

助

もう

もの

じきことなり。失もなくして、国をたすけんと申せし者を、

もち

ほけきよう

だいご

まき

にちれん

用いこそあらざらめ、また法華経の第五の巻をもつて日蓮

面 打

ぼんでん

たいしやく

ごらん

がおもてをうちしなり。梵天・帝釈、これを御覧ありき。

かまくら

はちまんだいぼさつ

み

たま

いま

かな

鎌倉の八幡大菩薩も見させ給いき。いかに今は叶うまじ

よ

そうら

さんちゆう

い

き世にて候えば、かかる山中にも入りぬるなり。

おのおの

ふびん

おも

たす

各々も不便とは思えども、助けがたくやあらんずらん。

夜

昼

ほけきよう

もう

そうろう

ごしんよう

うえ

ちから

惜

よるひる法華経に申し候なり。御信用の上にも力もおし

もう たま

こころ

弱

まず申させ給え。あえてこれよりの心ざしのゆわきにはあ

おのおの

ごしんじん

厚

薄

そうろう

らず。各々の御信心のあつくうすきにて候べし。

大旨

にほんこく

ひとびと

いちじよう生

捕

たいしは、日本国のよき人々は、一定いけどりにぞなり

そら

浅

きようきよう

候わんずらん。あらあさましや、あらあさましや。恐々

きんげん

謹言。

のちのさんがつにじゅうよつか

にちれん

かおう

後三月二十四日

日蓮

花押

なんじようどのごへんじ

南条殿御返事